吹田に現存する「だんじり」

吹田に残るだんじり(地車)は建造年代や制作にあたった大工彫り物師の名が書かれた棟札や墨書があること、又建造時の姿や部材がかなり残っていることが高く評価されています。

しかも、江戸時代に製作されて現在も、曳行出来るものが残されているのは、大阪府下でも珍しいことです。

内面で紹介した だんじり(地車)は現在も曳行でき、この7台は平成10年9月に**吹田市指定有形民俗文化財**に指定されました。

過去にあった吹田の「だんじり(地車)」

田中町地車	昭和35年　大阪市城東区に売却。
南　町 地車	昭和38年　豊中市服部農業博物館に寄贈。 昭和63年　奄美大島に移設された原野農芸博物館で展示されていたが平成22年の集中豪雨で土砂災害を被り、部分的に修復中。
下新田地車	昭和45年　守口市八雲へ売却。
上新田地車	昭和45年頃　売却。
堀奥町地車	昭和54年　天王寺区五条宮に譲られたものが神戸市本住吉神社の茶屋区へ移る。
さつき会地車	昭和59年　芦屋市西之町に売却。
宮の前地車	昭和46年　尼崎市東桜木町へ売却。
西の庄地車	昭和35年　泉殿宮に寄進され社殿に鎮座。

南町地車の獅子噛は現在、自治会館掲示板の一部に使用されています。

浜屋敷では、いつでも「だんじり」を見ることができるよう「だんじり庫」を設けています。敷地の西に位置する「だんじり庫」は白壁が美しい外観で、金田町を除く六町会のだんじりを定期的に入れ替えて展示しております。

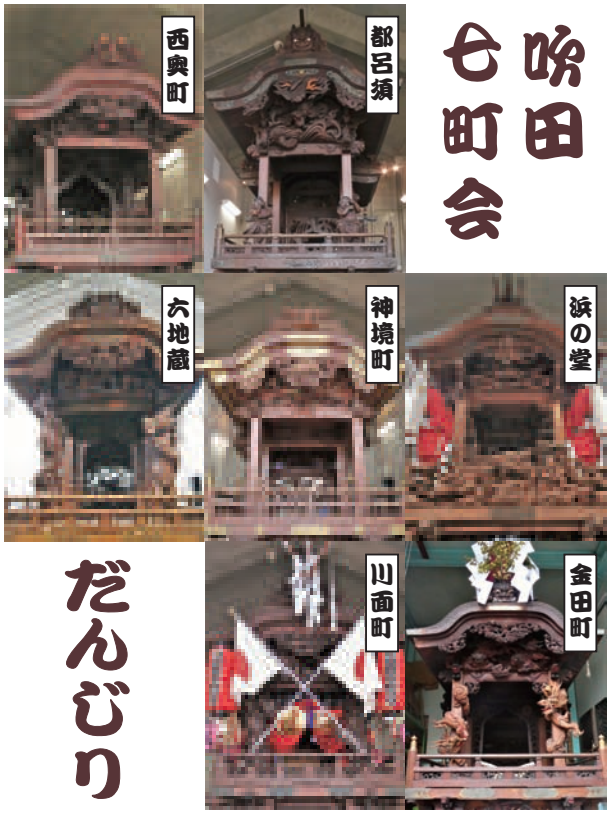
さいごに

江戸時代の地車は、大工仕事、部材の質と、全体のバランスが非常に良く、特に大胆で表情豊かな彫り物は見る者の心をとらえます。

貴重な地車が、時代の流れで一時軽視され、日の目を見ずに失われていったことは非常に残念ですが、近年になってようやくその伝統工芸の素晴らしさや、職人の技が見直され高い評価を受けるようになってきました。

地車は各自治会の財産であると同時に、市民共有の貴重な文化財です。これからも大切に守っていきたいものです。

資料提供：吹田市教育委員会文化財保護課



吹田歴史文化まちづくりセンター『浜屋敷』
〒564-0025 大阪府吹田市南高浜町6-21
電話：06-4860-9731 | メール：info@hamayashiki.com

発行：吹田歴史文化まちづくりセンター　令和2年(2020年)1月
発行部数：2000部(1部あたり4.8円)

吹田のだんじり

浜屋敷
吹田歴史文化まちづくりセンター

はじめに

「だんじり(地車)」は、泉殿宮と吹田歴史文化まちづくりセンター(浜屋敷)の「だんじり庫」で間近に見ることが出来ます。その大きさ・木目模様の美しさ・彫り物の豪快さは格別です。「だんじり(地車)」を通して、江戸時代の庶民のパワーとその魅力を感じていただければ幸いです。

獅子の彫物(西奥町)

だんじり(地車)とは

江戸中期以降に関西・西日本で始まったとされており、祭礼の時に、笛・太鼓・かね等の囃子方を乗せて曳行し奉納されるものとして継承されてきました。

語源は「だんじり」をあらわす文字としては「台尻」「段尻」「楽車」他、多数ありますが「壇尻」が代表的です。また、「だんじり」は担がれるものでなく、地面を曳かれる車であるために江戸時代に「地車」と呼ばれるようになったようです。

外形は地域により様々な型がありますが、上地車と下地車(岸和田型)とに分けられ、ほぼ神社建築様式で、豪華な装飾を施した祇園祭の山車(だし)とは異なり、彩色せず白木のままで庶民的、素朴です。

材質は木目が美しく堅くて耐久力のある「ケヤキ」を使っているのが多く、高級な黒檀や紫檀などを一部に使用しているものもあります。コマ(木製の車輪)は「松」が多く使われていますが、最近は強度安定の為、集成材が多用されています。

彫物は地車の価値を左右する重要な要素で、さまざまな動物(龍・獅子・兎・猿・鹿、等)や人物(武者・仙人)、植物(草木・花)などの彫物は、躍動感があり彫師の技で、地車を生き生きと豪華なものにしています。また鬼・龍などにはガラス玉を目玉にはめ込み、にらみ効果を出したりもしています。

龍の彫物(六地蔵)

費用・重さは地車の大きさ、材質、彫物等によって違いますが、今作れば約数千万～1億円以上にもなります。また重さは大体2～5トン前後になるようです。

西奥町地車(にしおく)

天保年間頃 製作
彫師:小松源蔵

いつ製作されたか、確定する資料は無いのですが、調査の結果、この地車の一部の材には天保期をさかのぼる古い材が含まれていることが判明し、古い地車の姿を推量することのできる貴重な地車です。

製作にあたった棟梁は不明ですが、墨書によって細工人3名と彫師として小松源蔵の名があり、小松源蔵は代々名工を輩出した名門の彫師で吹田とは関わりが深い彫師です。

彫刻は、牡丹に唐獅子、龍など他の地車に類するものですが中でも松竹梅に鶴亀、翁媼を配した三枚板の彫刻や、一木から掘り出した花頭口(花弁を模した上部が曲線の窓)は圧巻で、当時の高い工芸技術を知ることができます。

都呂須地車(とろす)

天保6年(1835年)製作
大工:彦兵衛 / 彫師:花岡良造 / 飾師:富永伊兵衛

現存する地車の中で、府下で最古(天保5年製作)交野市の地車に次いで2番目に古い貴重な地車です。

市内の地車の中では一番背が高く、幅が狭いため、台座の一部を削って車輪の間隔を拡げ、重心の安定をはかる工夫が見られます。前面柱前には、童形の力士像を一対配置する他、見送り部(後方)をはじめとして、牡丹に唐獅子の彫刻で埋め尽くされ、兎、猪、猿、鹿などの動物も彫られています。

打ち出し技法による繊細な竜文の飾金具を用いるなど、豪華な手法が各所に見られます。

六地蔵地車(ろくじぞう)

天保10年(1839年)製作
大工:木村茂右衛門・茂兵衛　彫師:森上弥兵衛

製作以来、高浜神社の祭礼や奉祝行事に際して曳行され市民に親しまれている地車で、大工の木村茂右衛門は、吹田村六地蔵の人です。三枚板は中国の物語(三国志)を題材にした人物像、各所に牡丹、唐獅子、花鳥草木、を配するなど、全体を装飾化する傾向がみられます。前と後の懸魚(屋根下中央飾り板)の植物と麒麟の彫物は独特です。

地元で製作され、現在まで建造当時の状態をよく止めていて天保期の在地型地車の典型として、貴重なものです。

神境町地車(しんけい)

天保13年(1842年)製作
大工:田原喜右衛門・太兵衛 / 彫師:小松源助勝美　他

小松源助勝美は小松一門の初代源蔵の別名といわれ小松一門が吹田の地車製作に大きく関与していました。この地車の彫り物は牡丹に唐獅子が主体ですが、見送り部(後方)に宇治川の先陣争い、佐々木高綱、梶原景季、畠山重忠の武者像といった新しい題材が用いられています。

市内の地車の中では台座の丈がもっとも高いにかかわらず下層部の高さが一番低いという特徴があり安定した外観を呈しています。尚、現在の飾金具類は、昭和36年の大修理の際、付け加えられたものです。

浜の堂地車(はまどう)

天保年間頃 製作

正面の欄干部を手摺とせず、「富士の巻狩」を題材に採る彫刻をはめ、脇障子は側柱が欄干の親柱を兼ねる仕様に造られ、棟端の鬼板を獅子面とせず「濱」の字を彫り込む獅子口にする等、市内の他の地車に無い斬新な意匠がみられます。

部材は細く対照的に彫刻は大きく彫り上げたものが多いという構成をとりますが、上層部は丈を高くし装飾を抑えて簡素にまとめ、下層部では縁を支える肘木を多用し、全体に建築的な構成をはっきり見せる造りとなっています。

彫り物に主体を移す傾向がみられる地車にあって、浜の堂地車は、あえて建築に主体をおく古風さを意識して製作されたとみられます。

川面町地車(かわづら)

嘉永7年(1854年)製作
大工:並河長兵衛兼廣 / 彫師:相野藤七

この地車には、製作年の棟札が残り、同時に金田町地車も手がけていた吹田の大工、並河長兵衛兼廣によって建造されたことが知られます。台座に彫刻を施し中央通柱に加え、後部通柱にも彫り物をいれる脇障子を構え二対とするなど、市内では例がない独自の意匠がみられます。

又、棟端につく三面の鬼板のうち前屋根は獅子面としているが後屋根を波濤と向き合う竜の彫り物としていて、市内では数少ない手法が用いられています。細かい彫り物を、随所に配するなど建築的形態から彫刻が前面に出て、工芸化に向かう地車建造の様子を良く伝える作品です。

金田町地車(かねでん)

嘉永7年(1854年)製作
大工:並河長兵衛 / 彫師:相野一門

2年に1度しか曳行されない小ぶりの地車ですが、棟端の三面の鬼板のうち前屋根には、性別を示すような角の有る鬼と角の無い鬼とし、後屋根は全く異なった谷を昇る中国の人物像とする珍しい鬼板が用いられています。又、龍が描かれた鏡天井(一枚板天井)など独自の手法が見られます。

(地車の説明文は、吹田市教育委員会資料を参照しています。)

鎧武者と馬の彫物(神境町)